

授業での活用
  家庭学習での活用
  パフォーマンステストでの活用
  小学校
  中学校
  高等学校

### 実践のポイント

AI会話で**発話量増加・表現の定着、自信の醸成、児童生徒の主体的な学びの促進**を図る

#### 実践前

- 英語の発話に緊張し、苦手だと感じる
- 台詞を暗記暗唱するような会話練習
- 自信が持てず言語活動に消極的
- 教師が学習方法や時間を指示



#### 実践後

- 心理的安全性を確保、発話量増加
- AIとの会話で自然な会話表現の定着
- 自信が付き言語活動に積極的に参加
- 児童生徒が自己調整する学びの姿

### 実践内容

- 実証校数：18校（小学校：17校、中学校：1校）
- 対象人数：3,275名（小学校：3,008名、中学校：267名）
- 対象学年：小学校：第5、6学年、中学校：第1、2、3学年
- アプリ等：ECC Study Assist（株式会社ECC）
- 研究内容：授業や家庭学習、パフォーマンステスト前の事前練習において、児童生徒がAIと会話練習を実施。
  - ・授業では5分～10分程度の時間で、帯活動でのウォームアップや、言語活動前後の模擬練習として活用。
  - ・AIが児童生徒の1対1の練習相手なることにより、教師の役割や指導方法はどのように変化するのか、言語活動の充実につなげるために、どのような工夫が必要かの検証。
  - ・AI会話導入による児童生徒の学びの姿や英語力、英語への関心意欲の変化の検証。

### 「AIの効果的な活用」と「教師の役割の変化」

#### ◆ 言語活動前に既習表現を使ってAIとリハーサル

AIとの会話で発話機会を確保。表現の定着や、自信の醸成を図る。展開する会話で、即興力を養う。

教師は机間指導で、個別練習中の児童生徒の見取りと重点指導を行うことに注力する。



#### ◆ 言語活動時の自己調整ツールとして活用

言語活動時、対人の練習に自信のない児童生徒の練習相手として活用。主体的な学びにつなげる。

教師はAIに限らず、個々の学習状況に応じた教材を準備・提示し、主体的に学習できる環境を整備。



### ここが落とし穴！「AIの活用」と「教師の役割」

#### ◆ 言語活動とのつながりを意識したAIの活用

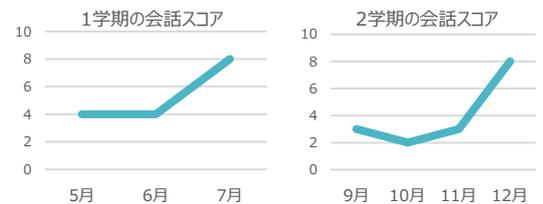
児童生徒は与えられた時間の中で、教師から指示された箇所を練習するが、何のための練習が分かっておらず、同じ箇所を理由なく延々と繰り返す様子があり、間延びしていた。

教師は、練習の目的や目標を提示し、言語活動とのつながりを示すとともに、適切な選択肢を与えることで、児童生徒が主体的に学習内容や方法を選択できるよう促すとよい。また、時間を区切り中間指導や振り返りを挟むことで、メリハリをつけるとよい。

### 成果検証

#### ◆ 児童生徒の英語力

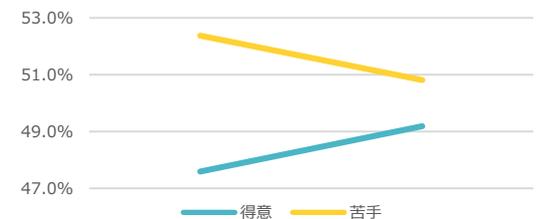
AI会話を繰り返すことで表現が定着し、学期ごとの会話のやり取りの量や正確性の向上が見られた。



※やり取りの正確性や会話量を独自の指標により評価した、会話スコアの中央値を比較

#### ◆ 児童生徒の関心・意欲

学習難度が上がる学年後半においても、「英語で話すことがとても得意/どちらかといえば得意」と児童生徒の**49%**が回答し、実証開始前と比較して**2%増加**した。



#### ◆ 教師の指導

AI活用の効果について、「児童生徒一人一人に応じた学習内容を提供することができる」と回答した教師の割合が一番多く、**62%**にのぼった。他、AIとのやり取りを踏まえて、**児童生徒を励ます具体的な声掛けが増えた**と**62%**が回答した。

一斉授業から、児童生徒一人一人の学習進度や到達度、興味・関心に応じた学習内容を提供することで、児童生徒が自ら考えて学習する姿を引き出す意識ができたと考えられる。